

大学生のサークル活動におけるコミュニティ維持に関する質的検討

著者	北本 遼太, 茂呂 雄二
著者別名	Kitamoto Ryota, Moro Yuji
雑誌名	筑波大学心理学研究
号	53
ページ	13-21
発行年	2017-02-28
その他のタイトル	A qualitative study of community building among university student clubs
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145699

大学生のサークル活動における コミュニティ維持に関する質的検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 北本 遼太

筑波大学人間系 茂呂 雄二

A qualitative study of community building among university student clubs

Ryota Kitamoto (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yuji Moro (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Recently, the significance of university club activity has been increasing. In this paper, we investigate the process of community building within university student clubs through a qualitative approach. Consequently, four hypotheses concerning community building were generated from the study: (1) Students build community through reciprocal interactions between in-group and out-group orientations; (2) Students recognize the diversity within their community and realize mutual cohesion through activities; (3) Students employ some out-group resources in building their community; and (4) Students are supported by their associate members.

Key words: community building, university student clubs

問題と目的

大学生生活において、講義や研究活動といった正課活動だけでなく、サークル活動をはじめとする正課外活動も重要視されている。文部科学省の2000年の報告では、「正課教育や正課外教育の中で、学生が社会との接点を持つ機会を多く与えたり、また、学生の自主的な活動を支援するなど、各大学がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ、個性化や多様化を進める中で適切に取り組んでいくことが期待される。その際、従来、正課教育を補完するものとして考えられてきた正課外教育の意義を捉え直し、そのあり方について積極的に見直す必要がある。」と述べており、大学教育が取るべき方向の1つとして、サークル活動をはじめとした正課外教育の積極的な捉え直しの必要性を指摘している(文部科学省, 2000)。また、大学生の49.0%が何らかのサークル活動や部活動に参加しており、そうした経験者の75.1%が就

職活動においてこうしたサークル活動や部活動が活かされたと回答しており(Benesse 教育研究開発センター, 2012)。こうしたサークル活動における経験が大学生活の中だけでなく、その後の就職活動といった様々な場面においても重要であると考えられる。こうした大学生活におけるサークル活動の意義の見直しの必要性や、サークル活動を通じた経験の重要性を考慮するとサークル活動において大学生はどのような経験をし、どのように学習をしているか検討する必要があると言える。そこで、本研究では、大学生のサークル活動に注目して研究を行なう。

従来 of 心理学におけるサークルを対象とした研究

こうした大学生のサークル活動を取り扱った研究は社会心理学の分野で多く行なわれている。例えば、橋本・唐沢・磯崎(2010)は、大学生が所属するサークル集団をフォーマルな組織とインフォーマルな集団の双方の特徴を併せ持った準組織的集団と

位置づけ、そうした準組織的集団への大学生のコミットメントについて検討した。その結果、情緒的コミットメント、規範的コミットメント、集団同一視コミットメントという3因子を抽出し、集団への愛着や凝集性といったそれぞれを規定する要因についても明らかにした。

また、尾関・吉田(2007)は、サークル集団における迷惑行為の生起や認知に対して組織風土と集団アイデンティティが及ぼす影響を検討した。その結果、集団がどの程度管理されているかである管理性によってサークル集団内で出現する迷惑行為が異なる事などが明らかになった。

こうした研究の特徴として、固定的な特性を持つ集団としてサークル集団を捉え、そうした集団への帰属意識といった大学生が持つ要因がサークルへの参加に与える影響を検討しているという点があげられる。ところで、学習心理学において、コミュニティを構築する中でいかに人々がコミュニティとして学習するかという点に着目する重要性が指摘されている(Holzman, 2009, 2014)。こうした指摘を考慮すると、従来の心理学的なサークル研究が前提としていた「固定的な特性を持った集団への参加」という側面だけでなく、自ら能動的にサークル活動を構築・維持し、その中行なわれる学習について検討する必要があるだろう。次節では、こうしたコミュニティビルディングという学習論の観点から行なわれた研究をレビューし、本研究が取るべき方向性について議論する。

大学生のサークルを対象としたコミュニティビルディング研究

佐藤(2012)は、大学生のサークル活動として行なわれる学生オーケストラの音楽づくりの特徴として、4年間でのメンバーの入れ替わり、演奏技法や練習経験における個人差の大きさ、メンバーの演奏技能の向上を目的とした教育的機能の存在を指摘している。こうした特徴を持つ学生オーケストラの練習場면을検討した結果、蓄積された経験や文化を生かしながらも、絶えずそれらの伝統を見直し、作り直す活動が内包されているということが明らかになった。

また、新原・茂呂(2014)は、大学生の部活動として行なわれている学生オーケストラの指導場面における指導者の働きかけについて検討した。そうした指導において、指導者は他のパートの音を聞きながら演奏するようにと指示し、メンバー同士がお互いのリソースになるように演奏活動におけるリソースの再配置を行っていた。また、こうした指導は、

事前に確立されていたものではなく、具体的な演奏やオーケストラの出した音、指揮者自身の経験といったものがまじりあうプロセスの中で顕在化したものであると指摘している。

以上の佐藤(2012)や新原・茂呂(2014)の研究が示すように、コミュニティは、固定的に存在しているものではなく、そのメンバーや指導者といった様々なコミュニティに参加する人々によって作り変えられながら維持されているものであると考えられる。ただし、佐藤(2012)や新原・茂呂(2014)の研究は、学生オーケストラの1つの活動としてある本番に向けた練習場面を取り出して微視的に検討しており、そのために、こうした本番や練習といったサークルの活動がサークルというコミュニティの維持においてどのように位置づくか検討されていない。そのため本研究では、従来の心理学的な研究が前提とした固定的な集団としてのサークル集団ではなく、コミュニティの参加者の能動的な動きの中で揺れ動くものとしてサークル活動を捉え、どのようなサークル活動が行なわれ、それらがどのようにコミュニティの維持に関係しているかに関する仮説を生成することを目的とする。なお、佐藤(2012)や新原・茂呂(2014)に倣い本研究では多種多様なサークル活動の中でも特に音楽演奏活動を主に行うサークル(以下、音楽系サークル)を対象に調査を行う。

方法

調査対象者

関東地方の国立大学の音楽系サークルの代表者を対象に調査を行った。なお、面接協力者の要望に応じて、6団体内で4団体は、複数人でのグループ面接を実施した(Table 1)。

倫理的配慮

本研究は、第一著者が所属する研究倫理委員会の

Table 1
調査対象者と所属集団の概要

	インタビュー参加者数	活動形態(在籍人数)	活動年数
No.1	3	合唱(12)	37年
No.2	1	リコーダーアンサンブル(7)	
No.3	2	ギター・マンドリンアンサンブル(22)	36年
No.4	3	フォークバンド(38)	42年
No.5	1	管弦楽(129)	42年
No.6	3	ブルースバンド(40)	15年

承認を得て実施された。面接調査の実施時には、匿名性が保たれること、調査への協力は自由意思に基づくこと、面接調査の回答後も回答を撤回できること、調査に協力しないことで不利益を被ることはないことを調査概要の説明書に明記し、口頭でも説明した。

データの取得

大学構内の実験室にて、半構造化面接を実施した。インタビュー項目として、「どのような活動をしているか」、「活動を行なうにあたって気を付けていることは何か」、「結成何年で、現在何名で活動しているか」、「活動ごとにどのような違いがあったか」、「それぞれの活動は集団にとってどのような意味を持っているか」、「活動を通して集団またはメンバーが変化したと思うか」といったサークルの活動内容に関する項目を事前に準備した。また、面接状況に応じて適宜、各質問の内容について掘り下げるため、追加の質問や質問の変更などを行なった。

分析方法

インタビューデータはトランスクリプト化し、M-GTA（木下、2003）を用いて、以下の手順で分析を行なった。①トランスクリプト化したデータを概観し、本研究で明らかにする動きである分析テーマ及びデータを解釈する視点である分析焦点者を設定した。分析テーマは「音楽系サークルにおいて、どのようにコミュニティが維持されているか」とし、分析焦点者は「音楽系サークルに参加し、活動を行っている大学生」としてそれぞれ設定した。②そうした分析焦点者と分析テーマに照らし、データのある箇所にも多様な解釈を行ない、概念を生成するオープンコーディングを行った。オープンコーディングでは、概念名、定義、ヴァリエーション、理論的メモから成る分析ワークシートを作成した。概念の生成と修正を同時に行い、それ以上、概念の生成と修正の必要がなくなった時点で理論的飽和が達成されたと判断し、次の選択的コーディングに移った。こうしたオープンコーディングの結果、21個の概念を生成した（Table 2）。③最後に、選択的コーディングでは、生成した概念同士の関係を表すカテゴリを生成し、カテゴリ間の関連から分析結果をまとめ、その関連を図示した結果図（Figure 1）と概要をまとめたストーリーラインを作成した。こうした選択的コーディングの結果、8個のカテゴリを生成した（Table 3）。

結果と考察

ストーリーラインに基づいて結果の説明および考察を行ない、「音楽系サークルにおいて、どのようにコミュニティが維持されているか」という分析テーマに対する仮説を生成する。なお、以下では概念については【 】, カテゴリについては〈 〉で示す。

内部向けと外部向けの相互補完的循環

各概念の発話例は Table 4 に示す。まず、音楽系サークルの活動では、サークルのメンバーだけで行なわれる【集団内のみの演奏活動】が行なわれていた。そこでは、【内輪の演奏活動における楽しさの優先】がなされており、〈内部向けの「楽しむ」ための場〉が設定されていた。こうした〈内部向けの楽しむための場〉が設定される一方で、〈外部向けの「きちんとした」場〉が設定されていた。〈外部向けの「きちんとした」場〉では、メンバー以外の観客に向けて【外部向けの演奏活動】が行なわれており、運営面や服装、演奏の質、といった点で【外向きのきちんとした活動】をする場として設定されていた。こうした場の多くは、自分たちの活動の集大成である【メインとなる演奏活動】と位置づけられていた。こうした〈内部向けの「楽しむ」ための場〉と〈外部向けの「きちんとした」場〉は、一見すると相反するものとして見える。しかし、サークルの活動は、これら2つの場のどちらか一方だけで構成されているのではなく、相互補完的に循環する志向性の中で構成されるものとして捉えるべきである。つまり、運営のスムーズさや演奏の質よりもメンバー同士で楽しみたいという【内輪の演奏活動における楽しさの優先】という志向と、外向けに運営がスムーズでよりよい演奏を行う「きちんとした」演奏会を行い、観客やサークルを取り囲むより大きなコミュニティからの評価を得たいという【外部からの評価への志向】という2つの〈志向性の相互補完的循環〉の中でサークル活動は構成されている。また、新入生や新体制の「お試し」として【集団内のみの演奏活動】を位置づけ、そうした経験の蓄積の発表の場として【メインとなる演奏活動】を位置付けているように、〈志向性の相互補完的循環〉の中で【演奏活動を通じたメンバーの再生産】を行なっている。このようにサークルというコミュニティの維持において様々な場の設定やその間の相互補完的な循環が重要であると考えられる。このようにサークルの活動を〈内部向けの「楽しむ」ための場〉と〈外部向けの「きちんとした」場〉の間の〈志

Table 2
M-GTA で得られた概念

概念名	定義	発話した団体
①外向けのきちんとした活動	外向けに行う演奏活動は、演奏の質、成員の服装、運営などにおいて、きちんとしたものを行なうものとして位置づけられている	No.2, No.3.No.4
②技術的な多様性	演奏活動における具体的なテクニックに関して、集団の中で意見や技能レベルに多様性が存在している	No.1, No.2, No.3, No.4
③活動を通したズレの認識	活動を通してメンバー間の考え方や活動に対する意見におけるズレを認識している	No.1, No.2, No.3, No.4, No.5
④ローカルな活動	サークルのメンバー全体が関わる活動としてではなく、各メンバーがローカルに行っている活動	No.1, No.3, No.5, No.6
⑤内輪の演奏活動における楽しさの優先	内輪の演奏活動において、演奏の質や運営がスムーズにいくといったものより、自分たちの満足感や楽しさを優先している	No.2, No.3, No.4, No.6
⑥演奏活動を通したメンバーの再生産	演奏活動を通して、新しい体制や、新入生がその集団での活動に慣れるといったメンバーの再生産が行なわれている	No.1, No.3, No.5
⑦観客との一体感	演奏活動を通して、全く知らない「外部」の観客を含めて、一体感を感じている	No.4, No.5
⑧凝集による楽しさ	集団として、まとまっていくことやまとまりを感じることを「楽しい」と語る	No.2, No.4, No.5, No.6
⑨プロからの支援	外部のプロからの指導や演奏の補助を受けるなど、演奏活動において外部のプロから支援を受けている	No.4, No.5
⑩集団内のみの演奏活動	集団の内部だけで行う演奏活動を設定している	No.1, No.2, No.3, No.4
⑪外部向けの演奏活動	「内部向け」の演奏活動に対して、外部向けの演奏活動を設定している	No.1, No.2, No.3, No.4
⑫コミュニティにおけるスタンダード	演奏するジャンルや、集団の伝統に則って、「普通はこのように演奏を行う」というスタンダードがある	No.1, No.2, No.3, No.4, No.6
⑬メインとなる演奏活動	集団内や演奏ジャンルにおいて、定期演奏会といった毎年恒例のメインとなる演奏活動が設定されている	No.2, No.3, No.4, No.5
⑭演奏活動に関する考え方の多様性	集団内で、演奏活動について様々な考えや意見を持つメンバーがいる	No.1, No.2, No.3, No.4
⑮活動を通した相互理解	活動を重ねることで成員同士の相互理解が行われている	No.2, No.4, No.5, No.6
⑯円滑な人間関係の重視	演奏活動の実施や、コミュニティを維持するにあたって、円滑な人間関係を重視している	No.2, No.3, No.4
⑰第三者の意見の重視	メンバー同士の意見の言い合いや、OBからの意見を参考にするなど、第三者からみて自分たちの演奏活動がどう見えるかといった客観的な意見を重視している	No.1, No.2, No.3, No.4
⑱外部からの評価への志向	自分たちの演奏活動が観客からの評価やジャンルにおいて共有されている基準といった「外」の評価によって、良いと評価されたいという志向	No.1, No.2, No.3, No.4, No.5
⑲OBからのアドバイス	演奏活動やサークル運営に関してOBからの助言を受けている	No.1, No.2, No.3, No.4, No.5
⑳他団体とのコラボ活動	他の団体と協働して活動を行っている	No.2, No.6
㉑観客からの評価	想定される観客の評価を意識して、プログラムの構成や、練習、演奏会の運営などの、演奏活動を行っている	No.1, No.2, No.3, No.4, No.5

Table 3
M-GTA で得られたカテゴリ

カテゴリ	該当する概念
I 内部向けの「楽しむ」ための場	⑤⑩
II 外部向けの「きちんとした」場	①⑬⑳
III 志向性の相互補完的循環	⑤⑥⑱
IV 成員の多様性	②④⑭
V コミュニティにおけるスタンダード	⑫
VI 活動を通した凝集と多様性の認識	③⑧⑮⑲
VII 演奏活動のリソースとしての「外」	⑦⑰⑳㉑
VIII 準メンバーからの支援	⑨⑲

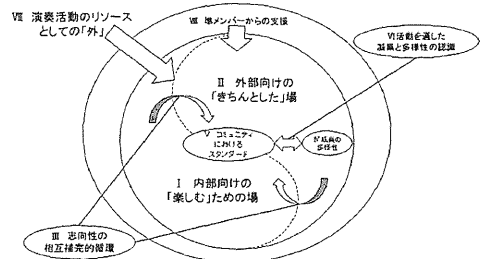


Figure 1. 音楽系サークルのコミュニティ維持についての結果図。

Table 4
内部向けと外部向けの相互補完的循環に関する概念の発話例

概念名	発話例
①外向けのきちんとした活動	・No.3-1：大学会館やホールを使うときの外部向けのもの場合はゲネプロや中間発表などで完成度や全体の流れを確認して、コンサート局内で運営、例えばその曲順や、では、どこで休憩入れるか、時間配分など、まあ外部向けなのでその辺の配分を考えて、その辺をまあ部員と部長中心に共有してコンサートの運営をするとまあ中間発表などでまあちゃんとOBから意見をいただいて曲の完成度を高めていく。意識っていう意味では、だいぶ違いますね。内と外で。
⑤内輪の演奏活動における楽しさの優先	・No.3-1：まあ部内向けのもはOBと部員しか聞かないのでそれはうち向けというか、ある程度なんていうのですかね。学外向けのものほど厳しく管理はしてないですね。それこそ曲順とか多少入れ替わっても、まあ仕方ないね程度の気持ちでやっていますしNo.3-2：自分がこう挑戦したいなって曲をこう気軽に出していくっていう形で、その外部の人が聞くわけではないのでその完成度が必ずしも高くなかったからと言って、こうそれでNo.3-1：パッシングじゃないけど。No.3-2：多くを咎めたりということはとくになく。まあ自分の満足というかそういう楽しみのためにやるという面が強いです。
⑥演奏活動を通したメンバーの再生産	・No.1-1：定期コンサートで三年生が引退して、その文化祭が初の新執行代のステージなのでなんかそういう意味も込められてるんじゃないかな。なんかクリスマスコンサートでなんかそのしん、しんーNo.1-2：新体制？No.1-1：そう新体制が始まるその一歩前になんか、No.1-3：お試し？(笑)No.1-1：お試し(笑)。
⑩集団内のみの演奏活動	・No.2：その前に一個サークル内発表会っていうのを設けてますね。そのサークル内発表会でやって、一応、内輪ではありますけど内輪で開く発表会で、新入生が最初に自分のパートを持った曲を演奏するっていう感じですよ。 ・No.4-3：あと内輪ライブだったら、こうなんていうかパートチェンジしたりすること。No.4-1：自分が本来、ギターをやってる人なんですけど、内輪のライブの時にちょっとベースやってみるとか、ドラム叩いてみようとか。No.4-3：その意外性があってちょっと面白いようなところがあるんですけど。まあ普段なんの楽器をやっている人が知らなかったら普通に。っていう感じですかね。
⑪外部向けの演奏活動	・No.3-1：外部向けは当然まあ部員の友人や親族であるとか、まあ他にも一般の方がふらっとやってこられたり、
⑬メインとなる演奏活動	・No.2：そうですね。やっぱり定期演奏会っていうのは、あの年度末のたい最近1月末か2月頭くらいなんですけど、くらいにあの一年の活動の集大成という形であの筑波センターのあたりにあるえっと。
⑲外部からの評価への志向	・No.5：その演奏会によってこうそうですねいっぱい来て下さる時とちょっと今回はあんまり少なかったねってあるんですけど。やっぱり多い、お客さん多いほうが、雰囲気よく、お客さん多くて雰囲気悪くなることは、無いので、こうなんだろう演奏者としてもそうですね張り合いが増えるというか。

※()内は筆者注

向性の相互補完的循環」という動きとして見ることで、従来の固定的な集団への参加というサークル活動の視点ではなく、自分たちでそれぞれの場を設定し、設定した場の間を能動的に行き来しているという大学生のサークルを対象とした研究における新たな視点が提供できたと考えられる。

メンバーの凝集と多様性の認識

各概念の発話例はTable 5に示す。音楽系サークルは、演奏技術の巧拙といった【技術的な多様性】や楽しければよいというメンバーがいる一方でよりよい演奏を突き詰めたいメンバーもいるといった【演奏活動に関する考え方の多様性】やサークルのメンバー全員が関わらず、各メンバーが個別に行

Table 5
メンバーの凝集と多様性の認識に関する概念の発話例

概念名	発話例
②技術的な多様性	・No.4-3: なんかその人によってなんか、まあドラムの話になっちゃいますけど、その人連打が得意とか、そのなんか速いテンポの曲だとノリよくたたくけど、ゆっくりだと雰囲気が出せなかったり、ギターでもその激しくこう激しい技巧的なギターソロはめっちゃ弾けるんだけど、なんか雰囲気のあるやつは難しいとかそういうその人によって得意分野、不得意分野があるのでそれで、うん。
③活動を通したズレの認識	・No.4-2: まあ突き詰めたい人は、一人いて他3人がまあ楽しめれば良いやっていう人がいたら結局、突き詰めたい人がこいつらの意見を全員変えてまでやる労力を費やすか費やさないか。あの自分がここで少し妥協すればうまくいくんだったら妥協すればいいやって思う人もいれば。逆に突き詰めたい人しか集まらなかったりするとすごい意見の言い合いになってもめるみたいな。
④ローカルな活動	・No.6-3: でも野球とかもやってるじゃん。No.6-1: でも半分以上OBなんですよ。…No.6-1: あれは野球好きな人が多いからですかね。No.6-3: なんか別に公式の活動じゃないけど。
⑧凝集による楽しさ	・No.2: 仲良くなってるほうがやっぱり気心知れてる間柄の方が同じ曲を演奏するにもあの意見も出しやすいですし、合わせたりフォローとかもしやすいですし。演奏するうえで何でしょう、楽しかったり安心だったりっていうのはありますね。
⑫コミュニティにおけるスタンダード	・No.5: であつたが気にしないっていう人もいて自分たちがやりたくてやって、楽しくやりたくてやってるからお客さんは気にしないっていう主義の人もいるんですけど、団としてはいろんな人に来てもらおうっていう方針なのでお客さんふやそうっていうか、そういう方針なので、まあそうですね。 ・No.1-3: 基本みんな合唱をやっているの、やっぱり合唱にしやすいようなJpopをみんな選んでくる傾向があるので。なんかすごいロックバンドの曲を選んできたりとかはしないので。
⑭演奏活動に関する考え方の多様性	・No.4-1: メンバー同士での違いもあるし、意識も一人はすごく、突き詰めてやりたいんだけどもう一人は楽しければいいやっていう人もいます。
⑮活動を通した相互理解	・No.4-1: たとえば普段の会話の中で、なんか面白い人がいたりして、その人をいじるっていう形だったり。その人個人を知らないとか笑えないような、笑いのネタっていうんですかね。MCとか。
⑯円滑な人間関係の重視	・No.4-2: まあそんなにたぶんほんとに自分が思っても、自分が思っても人間関係崩さないように書かないって可能性もあるので、ちょっと厳しいこと言いたいんだけど結局あいつと仲悪くなるのは嫌だから、まあちょっとやんわりと書いておこうとか。

なっている【ローカルな活動】といった〈成員の多様性〉を内包していた。こうした〈成員の多様性〉は、【活動を通したズレの認識】といったようにサークルの活動を通してメンバーの間で認識される。このような〈成員の多様性〉がある一方で、演奏するジャンルや、サークルの伝統に則って、「普通はこのように演奏を行う」という〈コミュニティにおけるスタンダード〉も同時に存在している。こうした〈コミュニティにおけるスタンダード〉も〈成員の多様性〉同様、【活動を通した相互理解】や【凝集による楽しさ】といったように活動を通して、自分

たちの共有する「スタンダード」を形成しており、〈活動を通した凝集と多様性の認識〉が行なわれている。また、【活動を通したズレの認識】の際にズレの指摘による人間関係の悪化の懸念や、【活動を通した相互理解】によってお互いをよく知り、仲良くなるのが演奏上重要であるといったように【円滑な人間関係の重視】が〈活動を通した凝集と多様性の認識〉において、中心的な概念として考えられる。こうしたように円滑な人間関係を重視しながら、メンバー間での凝集とお互いの違いの認識を繰り返す緊張関係の中で、サークルというコミュニ

Table 6
「外部」というリソースを用いたコミュニティの維持に関する概念の発話例

概念名	発話例
⑦観客との一体感	・No.5：…あとは拍手をすごく暖かくしてくださって、一曲目二曲目三曲目でちょっとづつ開けて演奏するのでその会場が一体になりやすい時とか、またその逆とかっていうことが結構あります。
⑰第三者の意見の重視	・No.1-3：録音したり、その辺で暇そうなの（成員を）捕まえてきて、ちょっと聞いてみたいな。感じだったりとかです。
⑳他団体とのコラボ活動	・No.2：うんと。学園祭でえっとT大学のギターマンドリン部さんとコラボで同じ曲を一緒に演奏するという事はやっていますね。
㉑観客からの評価	・No.2：あの以前なんかお客さんの、そうか、さっき言ったように古典の曲だとお客さんの知らない曲が多かったり、その辺ちゃんとしたクラシックなので聞いていて、眠くなったりすることがあるみたいなんですけど、なんかお客さんがそういう様子だったら、そのちょっと眠くなるような曲のあとは、ちゃんと明るかったりとか、ちょっと早めの曲だったりとか、テンポのいい目が覚めるようになっていったらおかしいですけど、そういう曲を入れるプログラムにしてみたりとか、そういう面ではお客さんを意識することはありますね。なんかこの曲とこの曲を続けてやったらお客さん寝ちゃわないかなとか、そういうことは会話はしてまずね。

※（ ）内は筆者注

Table 7
メンバーシップのあいまいなステークホルダーの存在に関する概念の発話例

概念名	発話例
⑨プロからの支援	・No.4-2：まあそれこそバンドによって声が大きいい人、声の小さい人、ギターの音が小さい人低い人、ああ小さい人、大きい人がいてそのまあある程度セッティングして、まあプロの人でもある程度こんな感じかなってセッティングして、実際音を聞いてから微調整をするんですけど。その微調整は最初の予想した段階でだいたいプロの人はほとんど最適な音を作れてて、ほんとあと、微調整するだけ。素人はほんと、最初から、最初の音を聞いてから、これはどうすればいいのかって、どう変えればいいのかって本当に時間もかかっちゃうし、ライブの前の準備で10分、15分かかっちゃうところをプロは5分とか3分とかでもう仕上げちゃって、もう始めてくださいとか。
⑲OBからのアドバイス	・No.5：…この曲は、こういう時代のこういう作曲家のものだから、こういう風にやる習わしがあるとかそういうなんだろう。決まり事とかもなかなかやっぱり学生で、アマチュアなので分からないこともあって、そうすると指揮の先生はプロで全部わかっている方なので教えてくださったりとか、しますね。 ・No.3-1：中間発表はOBさんにこの日にやりますよっていうのを周知して、で来ていただいたOBさんにまあ実際に定期演奏会でやる曲をその順番で演奏して、パフォーマンスでまあどこを直せばもっと良くなるよとかそういう指摘をいただくのが中間発表ですね。 ・No.5：先輩は技術的にも上手いし、そのオーケストラで吹く経験も自分よりあるってなるとここはこういう風に表現したいんだけど具体的にどうしたらいいかわかんないって相談して、そうするとこういう風にえっと音の切り方とか吹き方とか、音の入り方と伸ばし方と切り方とかをこういう風にすればいいんじゃないかって具体的なアドバイスをもらってじゃあそうしようってパートで共有するとうまくいったりとか、そうですね、OBの先輩方にはいろいろと協力してもらってやるって感じですかね。

ティは維持されていると考えられる。

「外部」というリソースを用いたコミュニティの維持

各概念の発話例は Table 6 に示す。こうした音楽系サークルの活動は、外とのつながりによっても維持されていると考えられる。例えば、【観客からの評価】といった外部の【第三者からの意見の重視】を行いながら演奏活動を行なっている。こうした【第三者からの意見の重視】は、【外部からの評価への志向】と関係し、〈外部向けの「きちんとした」場〉を形成する際の重要な基準として重要なものであるだけでなく、〈内部向けの「楽しむ」ための場〉の形成においても重要である。というも、〈内部向けの「楽しむ」ための場〉においては、共に活動し相互に理解しあった中でなければ分からない「内輪ネタ」を楽しむということが行われていた。こうした内と外の境界に関する議論として、松浦 (2015) は、コスプレイヤーたちは、人工物への独自の意味付与を行い、それらの人工物の意味付与が、コスプレイヤーとそうでないものの境界をデザインすると主張している。こうした松浦 (2015) の指摘を考慮すると「内輪ネタ」が分かり楽しめる「内部」とそれが分からない「外部」という形でメンバーは境界をデザインしていると考えられる。また、こうしてデザインされた境界も固定的な物ではなく、演奏活動において【観客との一体感】を感じたり、普段活動を共にしているメンバー以外との活動を希求する【他団体とのコラボ活動】といったように、様々な形でコミュニティの境界を乗り越える「越境 (Engeström, Engeström, & Kärkkäinen, 1995)」を行っている。

メンバーシップのあいまいなステークホルダーの存在

各概念の発話例は Table 7 に示す。また、こうしたサークル活動では、【OB からのアドバイス】や、演奏の指導や補助といった【プロからの支援】が行われており、OB や外部のプロといったサークル活動を支えるステークホルダーの存在が明らかとなった。こうしたメンバーであるか、メンバーでないかの境界があいまいな〈準メンバーからの支援〉の役割として、次のようなものが考えられる。OB については、一度はサークルのメンバーとして〈コミュニティのスタンダード〉を共有しつつも、引退と共に少しサークルから距離を置くことで現役のメンバーにとって全く見ず知らずの観客に比べて評価やアドバイスを受けやすい「外部」として機能してい

る。また、プロについては、自分たちの演奏形態の歴史や習わしを「よくわかっている」人物として位置づけられ、演奏形態に関する知識や演奏技術の不足といったアマチュアとして活動する大学生のサークル活動の制限を突破する機能を持っている。こうしたように、すでにサークルを引退した OB がアドバイスの役割としてサークルの運営や演奏活動に関わったり、プロとして活動を行っている人物から指導や補助を受け活動を行っているなど、コミュニティの維持において境界の曖昧な準メンバーの存在が重要であると考えられる。

まとめと今後の展望

以上の分析により以下の4つの仮説が生成された。

仮説①：サークル内部だけで楽しむことを志向する演奏活動とサークルの外部からの評価を志向する演奏活動の相互補完的な循環によって音楽系サークルのコミュニティは維持されている。

仮説②：演奏活動を通して、メンバーの技量や活動への意識といった多様性の認識とそうした多様性をサークル内で行われる演奏活動以外の遊びや日々の練習といった活動を通してまとめる凝集という2つの志向性の緊張関係によって音楽系サークルのコミュニティは維持されている。

仮説③：演奏活動以外の遊びや日々の練習といった活動を通じた凝集とそれに伴うサークル内のみで通じる内輪ネタが分からない「外部」と分かる「内部」といった、演奏活動によって境界をデザインすることで音楽系サークルのコミュニティは維持されている。

仮説④：サークルの OB やプロの指導者といった集団へ所属しているかどうかのあいまいなステークホルダーである準メンバーの支援による自分たちの演奏技術の向上やサークルの運営方法の継承といった形で音楽系サークルのコミュニティは維持されている。

今後の展開としてこうした仮説のさらなる精緻化が考えられる。例えば、仮説④では、〈準メンバーからの支援〉という独特なステークホルダーがコミュニティ維持において担う役割の1つを明らかにしたが、こうしたステークホルダーがコミュニティ維持において担う役割は様々なものが想定可能であり、今後そういった役割についてさらなる検討が必要である。また、本研究のデータからはプロや OB といったステークホルダーが明らかとなったが、その他にどのようなステークホルダーが存在し、多様なステークホルダーとコミュニティ維持の関連も検

討する必要がある。

引用文献

- Benesse 教育研究開発センター (2012). 大学データブック2012 Retrieved from http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai_databook/2012/pdf/data_07.pdf (2016年9月28日)
- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. (1995). Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instruction, 5*, 319-336.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年 (2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル—準組織的集団の観点からの検討— 実験社会心理学研究, *50*, 76-88.
- Holzman, L. (2009). *Vygotsky at work and play*. New York: Routledge. (ホルツマン, L 茂呂雄二 (訳) (2014). 遊ぶヴィゴツキー—生成の心理学へ— 新曜社)
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・ア

プローチの実践 —質的研究への誘い— 弘文社

- 松浦李恵 (2015). 人工物の利用を通じた成員性と「境界する物」—キャラクターを支える遊びとしてのコスプレを対象に— 質的心理学フォーラム, No.7, 14-23.
- 文部科学省 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告) —学生の立場に立った大学づくりを目指して— Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (2016年9月28日)
- 尾関美喜・吉田俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知—組織風土・集団アイデンティティによる検討— 実験社会心理学研究, *47*, 26-38.
- 佐藤公治 (2012). 音を作る, 音を聴く—音楽の共同的生成— 新曜社
- 新原将義・茂呂雄二 (2014). 合奏練習場面における指導者の働きかけをいかに捉えるか 認知科学, *21*, 468-484.

(受稿9月30日: 受理10月26日)